

# 幼児の人との関わりを評価する要因とその実践

大鐘 啓伸

## Factors and the Practice to Assess the Relation the Infant has to a Person

Hironobu OGANE

### I. 問題意識と目的

保育園では、遊びを通じた共感・応答的関わりによって、乳幼児の成長の促進に向けた保育を行っている。そこでは、保育者と乳幼児の遊びが対面相互作用によって、二者関係の枠組みや文脈を作り出していくことが愛着表現のパターンとなっていくものである。同時に、乳幼児は日常生活の中で保護者と愛着を形成している。

乳幼児を取り巻く日常環境のうち、保育園のように母親がいない生活場面に、保護者参観日という母親がいるというようなちょっとした変化が、乳幼児の愛着表現に影響を与えている。それは、保育園の日常においてはずのない母親が親子参観日にそこにいることで、新奇場面として設定された親子遊びに影響を与え、乳幼児がいつもと違う愛着に関する行動を表現するものである。

そこで、大鐘 (2016) は、愛着に関連する6個の行動パターンとして“接触・遊戯”、“近接・遊戯”、“分離・遊戯”、“接触・傍観”、“近接・傍観”、“分離・傍観”の相互作用から、親子の関係性について「安定した親子関係」、「分離不安を伴う親子関係」、「安心欲求を伴う親子関係」、「葛藤を伴う親子関係」にカテゴリー化されることを見出している。また、大鐘 (2016) は、この行動を「調律」と「分離不安」から評定し、愛着表現を「安定型」、「とらわれ型」、「恐れ型」、「拒絶型」のAinsworth et al., (1978)およびBartholomew (1990)の分類との関連性を示唆している。この両者が対応していることは、保育園という生活レベルの場面において、愛着を評価する要因が「調律」と「分離不安」になるであろう。

本研究では、大鐘 (2016) によって得られた愛着に関連する「安定した親子関係」、「分離不安を伴う親子関係」、「安心欲求を伴う親子関係」、「葛藤を伴う親子関係」が「調律」と「分離不安」の評定結果と対応するか確認することを目的とする。また、母子関係を援助することで、母親の育児不安が低減され (手島, 2007), 自尊感情が高まるとされている (大鐘, 2010a, 西出・江守, 2011)。そこで、発達障害をもつ乳幼児とその母親が乳幼児健診事後指導教室などの早期支援によって、その後の母子の愛着関係や母親の育児不安などの感情にどのように影響しているのかを検証するものである。

### II. 方法

#### 1. 調査対象

A市内の10保育園の保護者参観で行った親子遊びの場面とした。親子遊びへの参加に際して、

事前に母親に対して調査のためにビデオ撮影する旨を伝え、了解を得た母親とその幼児88組の親子遊びの様子をビデオで撮影した。うち、39組は援助を必要とされなかった母子(定型発達群)、31組は援助を必要とされて援助を受けた母子(非定型発達被援助群)、18組は援助を必要とされて援助を受けなかった母子(非定型発達未援助群)であった。なお、それぞれの群の対象数は、定型発達群と非定型発達被援助群が近似値となるように調整した。調整した理由は、ランダムにサンプルすると定型発達群が著しく多くなり、サンプル数に偏りが生じるからであった。また、非定型発達未援助群は対象数が少なかったことから、了解を得ることができた親子とした。定型発達群の母親の平均年齢34.9歳(SD=3.8)、幼児の平均月齢40.5月齢(SD=3.0)、非定型発達被援助群の母親の平均年齢34.7歳(SD=4.4)、幼児の平均月齢41.8月齢(SD=3.2)、非定型発達未援助群の母親の平均年齢34.2歳(SD=4.9)、幼児の平均月齢40.7月齢(SD=3.3)であった。時期はX年Y月であった。

## 2. 調査場面

一定の時間内で親子が一緒に課題に取り組む様子から幼児の愛着行動を観察するために、親子遊びのプログラムを日ごろ保育園で幼児が親しんでいる「どうぶつたいそう1・2・3」と「とんとんとんとんひげじいさん」、その後、ごっこ遊び「親子でお買い物」、絵本「おふろだいすき」の読み聞かせ、段ボールと新聞紙を使ったごっこ遊び「お風呂遊び」の概ね30分で設定した(図1)。母親には自分の子どもと、子どもには母親と一緒に遊ぶように教示し、母親と幼児の様子をビデオで撮影した。3か所の保育園の平均撮影時間は30分01秒(SD=.10)であった。

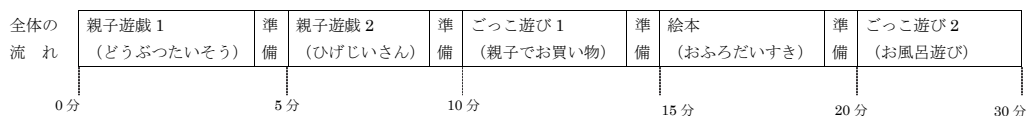


図1 幼児の愛着表現を観察するための親子遊びのプログラム

注) どうぶつたいそう：どうぶつたいそう1・2・3(詞曲作；阿部直美)。ひげじいさん：とんとんとんとんひげじいさん(詞曲作；不詳)。親子でお買い物：折り紙で作った果物や野菜を、段ボールと折り紙で作ったお金を使って、お店屋さん役の保育士のところへ親子でお買い物に行くというごっこ遊び。おふろだいすき(作；松本享子，絵；林明子，福音館書店)。お風呂遊び：段ボールの浴槽と新聞紙を細断してお湯に見立て、お風呂ごっこを親子で遊ぶ。

## 3. 愛着タイプの分類

ビデオに撮影された母親と幼児の様子のうち、日ごろ保育園で幼児が親しんでいる「どうぶつたいそう1・2・3」を、10名の保育士によって、次のとおり評定した。

- ① 調律的な関係：親子遊びを一緒に楽しんでいるかの評定。まったく両者が楽しく遊んでいない場合は1点、両者が十分に一緒に遊んでいる場合は5点。
- ② 分離不安の関係：親子が抱っこなど密着している状態を5点、乳幼児が保護者と安心して離れている状態を1点。

定型発達群、非定型発達被援助群、非定型発達未援助群の各幼児の愛着タイプについて、調律的な関係(調律性)と分離不安の関係(分離不安)の二次元の図面にプロットすることとした。

## 4. 母親の感情状態の評価

母親の感情状態の評定については、育児不安尺度(手島, 2007)、自尊感情尺度(Rosenberg,

1965；桜井，2000）を使用した。

- ① 育児不安尺度：育児に関して不安を感じると思う9項目の質問から構成され、全くあてはまらない（1点）、少しあてはまる（2点）、かなりあてはまる（3点）、非常にあてはまる（4点）の4件法で、1因子からなる質問紙である。この尺度は、手島（2007）によって妥当性、信頼性が確認されている。
- ② 自尊感情尺度：自分の能力や価値についての評価的な感情や感覚に関する10項目の質問から構成され、全くそう思わない（1点）、あまりそう思わない（2点）、時々そう思う（3点）、いつもそう思う（4点）の4件法で、1因子からなる質問紙である。この尺度は、Rosenberg（1965）によって作成されたものであり、桜井（2000）が日本語版を作成し、その妥当性、信頼性が確認されている。

## 5. 分類および対比

「調律性」と「分離不安」の評定結果と「安定した親子関係」、「分離不安を伴う親子関係」、「安心欲求を伴う親子関係」、「葛藤を伴う親子関係」が対応するかを、筆者、臨床発達心理士、保育長の3人で検討した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 幼児の愛着タイプ

定型発達群、非定型発達被援助群、非定型発達未援助群の幼児の愛着について、「調律性」と「分離不安」の二次元による評価を行った結果を、図2～4のとおり散布図上にプロットした。

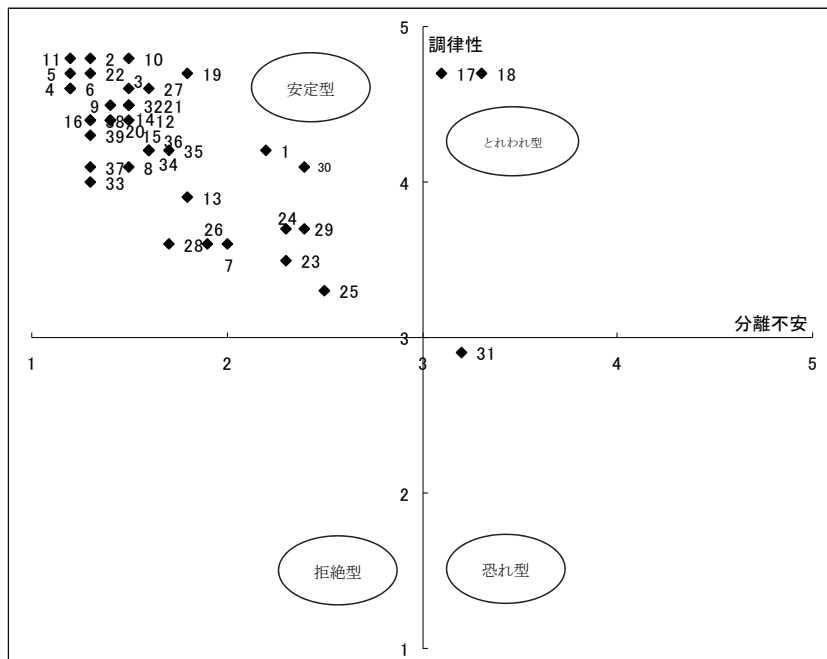


図2 定型発達群の幼児の分離不安と調律性の得点プロット

愛着タイプが安定型の領域にある幼児は36名、とれわれ型の領域にある幼児は2名、恐れ型の領域にある幼児は1名となっている。

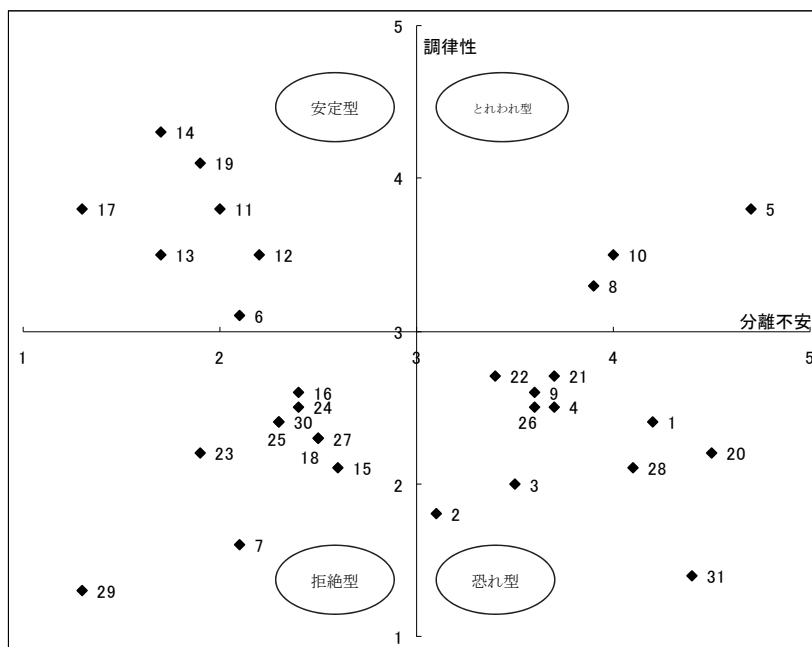


図3 非定型発達被援助群の幼児の分離不安と調律性の得点プロット

愛着タイプが安定型の領域にある幼児は7名、とれわれ型の領域にある幼児は3名、恐れ型の領域にある幼児は11名、拒絶型の領域にある幼児は10名となっている。

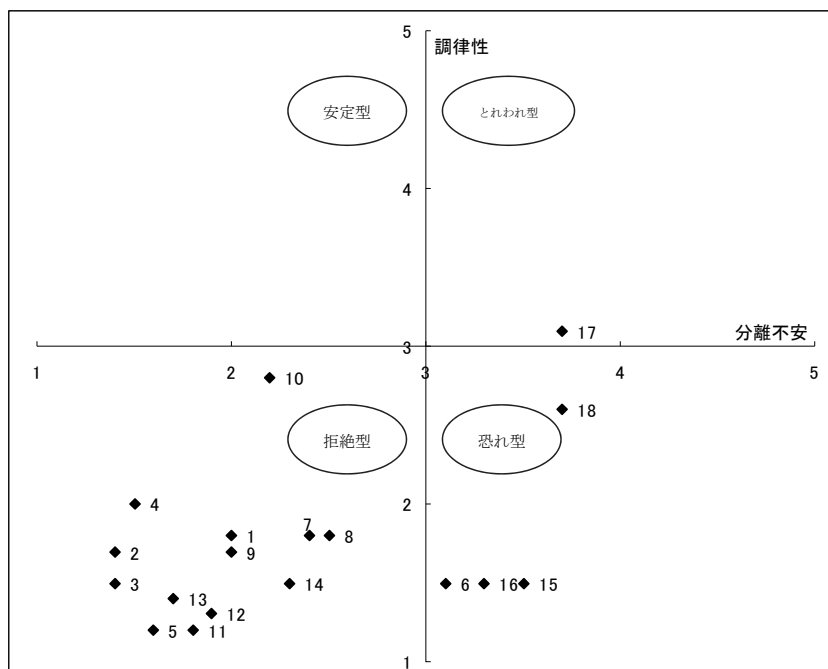


図4 非定型発達未援助群の幼児の分離不安と調律性の得点プロット

愛着タイプがとれわれ型の領域にある幼児は1名、恐れ型の領域にある幼児は4名、拒絶型の領域にある幼児は13名となっている。

この結果から、定型発達群の幼児は、安定型が36名（92.3%）で最も多かった。

非定型発達被援助群の幼児は恐れ型が11名（35.5%）、拒絶型が10名（32.3%）、安定型が7名（22.6%）であった。

非定型発達未援助群の幼児は、拒絶型が13名（72.2%）で最も多かった。

定型発達群、非定型発達被援助群、非定型発達未援助群の幼児の愛着タイプに差があるかをカイ二乗検定により分析したところ（表1）、定型発達群の幼児は他の群の幼児よりも安定した愛着タイプであり、非定型発達未援助群の幼児は他の群の幼児より拒絶型の愛着タイプが多かった。非定型発達被援助群と非定型発達未援助群の幼児の愛着タイプの差については、非定型発達被援助群の方が有意に安定型が多く、非定型発達未援助群の方が有意に拒絶型が多かった（ $\chi^2_{(3)}=8.83, p<.05$ ）。

表1 幼児の愛着タイプ

発達援助区分\愛着タイプ	安定型	とれわれ型	恐れ型	拒絶型	
定型発達群	36名	2名	1名	0名	$\chi^2_{(3)}=37.67$ $p<.001$ $\chi^2_{(3)}=8.83$ $p<.05$
非定型発達被援助群	7名	3名	11名	10名	
非定型発達未援助群	0名	1名	4名	13名	

$\chi^2_{(3)}=50.21$   
 $p<.001$

定型発達群：n=39，非定型発達被援助群：n=31，非定型発達未援助群：n=18

## 2. 母親の感情状態

母親の感情状態は、表2のとおりであった。定型発達群、非定型発達被援助群、非定型発達未援助群の母親の感情状態に差があるかを分散分析によって検定したところ、定型発達群の母親が他の群の母親よりも有意に育児不安感が低く（ $F_{(2,85)}=17.28, p<.001$ ）、自尊感情が高かった（ $F_{(2,85)}=61.35, p<.001$ ）。また、非定型発達被援助群の母親は非定型発達未援助群の母親よりも有意に育児不安感低く、自尊感情は高かった。

表2 母親の感情状態

発達区分	育児不安感	自尊感情
①定型発達群	13.64(3.20)	30.13(3.26)
②非定型発達被援助群	15.97(3.75)	25.42(2.46)
③非定型発達未援助群	19.22(2.96)	21.72(2.11)

$F_{(2,85)}=17.28, p<.001$

$F_{(2,85)}=61.35, p<.001$

①<②<③

③<②<①

定型発達群：n=39，非定型発達被援助群：n=31，非定型発達未援助群：n=18

## 3. 分類及び対比の結果

「安定した親子関係」、「分離不安を伴う親子関係」、「安心欲求を伴う親子関係」、「葛藤を伴う親子関係」と「調律」、「分離不安」による愛着表現とを対比したところ、表3のとおりであった。「安定した親子関係」の愛着表現は「安定型」であった。「分離不安を伴う親子関係」の愛着表現は「とらわれ型」であった。「安心欲求を伴う親子関係」の愛着表現は「恐れ型」であ

た。「葛藤を伴う親子関係」の愛着表現は「拒絶型」であった。

表3 愛着に関連する6つの行動パターンから分類された4つの親子関係と「調律」と「分離不安」によって分類された愛着表現との幼児ごとの対比

“接触・遊戯”，“近接・遊戯”，“分離・遊戯”，“接触・傍観”，“近接・傍観”，“分離・傍観”の相互作用から分類された親子関係 ※	「調律」と「分離不安」によって分類された愛着表現のタイプ ※※	
安定した親子関係	安定型	(安定型)
分離不安を伴う親子関係	アンビバ	(とらわれ型)
安心欲求を伴う親子関係	レント型	(恐れ型)
葛藤を伴う親子関係	回避型	(拒絶型)

※の親子関係は「親子関係の愛着表現の評価方法」の研究結果(大鐘,2016), ※※の愛着表現のタイプは「親子関係の愛着表現を評価する要因」の研究結果(大鐘,2017)による。※※の( )内は, Bartholomew(1990)の分類による。

## IV. 考 察

### 1. 援助要因と評価

幼児の愛着タイプについて, 非定型発達被援助群では, 恐れ型, 拒絶型が多く, 愛着の形成のリスクが窺われるものであった(大鐘, 2012)。非定型発達被援助群では非定型発達未援助群と比較して, 安定型が多いことから, 援助によって愛着の形成の効果が伺われた。また, 非定型発達被援助群では, 非定型発達未援助群と比較して調律も分離不安も共に高いことから, 分離不安を伴う親子関係になっていると考えられた。一方で, 非定型発達未援助群では拒絶型が多く, 心理的援助に繋げていくことが求められるものであった(大鐘, 2012)。非定型発達未援助群は葛藤を伴う親子関係になっていると思われた。非定型発達被援助群の母親は, 非定型発達未援助群に比べ育児不安感が低く, 自尊感情が高かった。これらのことから, 発達の課題のある乳幼児とその母親への早期支援は, 調律と分離不安を援助要因として, 幼児の発達の指標の一つである愛着を促進し, 母親の育児に対する効力感を高めていることが確認された。しかしながら, 定型発達群の幼児の愛着表現や母親の感情と比較すると, さらなる専門的な子育て支援が必要と考えられた。

### 2. 分類と対比

“接触・遊戯”, “近接・遊戯”, “分離・遊戯”, “接触・傍観”, “近接・傍観”, “分離・傍観”の相互作用から分類された4つの親子関係のうち, 「安定した親子関係」は安定した愛着関係をであったことから, 「安定型」の愛着タイプと考えられた。「分離不安を伴う親子関係」は幼児が母親との接近・分離によって分離不安の気持ちが現れており, 母親がいなくなるとらわれていることから, 「とらわれ型」の愛着タイプと考えられた。「安心欲求を伴う親子関係」は幼児が母親から離れることがなく, 母親がいなくなることを恐れている愛着関係であったことから, 「恐れ型」の愛着タイプと考えられた。「葛藤を伴う親子関係」は母親と関係することに葛藤が生じており, 母親と関わることはないものであった。これは, Bartholome &

Horowitz (1991) の「拒絶型」の「母親と関係したい気持ちがあるが、拒絶されるのが怖いため、母親とかかわることがない」に相当すると思われた。

小林(2011)は、発達障害児の母親に対するアンビバレントから、母子関係の在り方を分析し、発達障害児のこころの発達をアセスメントしている。このアンビバレントという状態を踏まえて、「親子関係の愛着表現の評価」の研究結果と「親子関係の愛着表現を評価する要因」の研究結果を対比すると、次のように考えられるのではなかろうか。それは、「安定した親子関係」と「安定型」、「分離不安を伴う親子関係」と「アンビバレント型(とらわれ型)」、「安心欲求を伴う親子関係」と「アンビバレント型(恐れ型)」、「葛藤を伴う親子関係」と「回避型(拒絶型)」というようにアンビバレントの様子を発達的に見ていくことができるということである。言い換えれば、幼児と母親のアンビバレントの様子は、調律と分離不安の状態を発達的に評価することによってアセスメントできるということである。

以上のことから、親子参観日の親子遊びの場面における幼児のそれぞれの親子関係と愛着表現を対比すると、各幼児の“接触・遊戯”、“近接・遊戯”、“分離・遊戯”、“接触・傍観”、“近接・傍観”、“分離・傍観”の相互作用から分類された親子関係と「調律」と「分離不安」によって分類された愛着表現のタイプは対応していると思われた。幼児が分離に伴う苦痛を回避する場合においては、近接により分離不安を表現するとともに調律の行動を避ける傾向があり、また、安定した愛着の幼児においては、分離に伴う苦痛に回避の表現はなく、調律した行動を表現すると推測された。

## V. まとめ

保育場面における親子関係は、愛着に関連した行動によって評価することができるものであるが、その要因としては「調律」と「分離不安」であり、また、この2つの要因は、幼児の人との関わりを促進するものと考えられた。さらに、継続的で専門的な子育て支援を提供していくためには、「調律」、「分離不安」に加え、保護者の「育児不安」と「自尊心」を、幼児の人との関わりを促進する要因として援助を行っていくことが重要であろう。

なお、本研究の課題には、幾つかの課題がある。大鐘(2010b)によると、K市の乳幼児健康診査では、医師によって乳幼児が精神発達障害など援助を要すると診断された割合が1歳半で31.6%、3歳児で21.6%に対して、心理相談などの援助数の割合が1歳半で14.6%、3歳児で10.2%であった。どちらの年齢も援助を要する乳幼児の約半数しか援助を受けていない現状であった。また、乳幼児健診事後指導などによるフォローの割合も36.9%と4割に満たない状況であった。相談や事後指導など援助につなげるための取り組みは行われている。しかし、援助を要する幼児の総てをフォローすることは難しい現状が報告されている。さらに、援助を要する幼児がフォローされていない具体的な問題点が明確になっていないことも課題として挙げられている(大鐘, 2010b)。なぜ、保護者は、自分の子どもの課題について援助を受けなかったのであろうか。そこには、子どもの発達に関わる特性が障害などの様々な要因として保護者の心理的側面に関与していると思われる。そのような子どもの特性は、保護者との関わり合い、保護者側の育児不安や自尊心に関連しているものであり、そのことが援助を受けなかったことにどのように関係しているのかが今後の研究課題であろう。

また、発達障害児は、行動や情緒の特性が個々によって様々であり、援助としての関わり方

も細かく見ていく必要があるため、本研究のように援助の要因を抽出することには一定の限界があろう。今後は、障害の程度や特徴を勘案し、様々な要因を重層的に分析していく研究に取り組むことが必要である。

## VI. 引用文献

- Ainsworth M D S・Blehar M S・Waters E・Wall S 1978 Patterns of attachment : A psychological study of Strange Situation. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum.
- Ainsworth M D S 1991 Attachments and other affectional bonds across the life cycle. (ed.) Parkes C M・Stevenson-Hinde J・Marris P : Attachment across the life cycle. London : Routledge, 33-51.
- Bartholomew K 1990 Avoidance of intimacy : An attachment perspective. Journal of Social and Personal Relationships, 7, 147-178.
- Bartholomew K・Horowitz L M 1991 Attachment styles among young adults : A test of a four-category model. Journal of Personality and Social Psychology, 61, 226-244.
- 小林隆児 2011 自閉症における愛着形成促進がこころの発達に及ぼす影響に関する臨床研究. 大正大学研究紀要, 96, 238-234.
- 西出弘美・江守陽子 2011 育児期の母親における心の健康度 (Well-being) に関する検討 - 自己効力感とソーシャルサポートが与える影響について -. 小児保健研究, 70 (1), 20-26.
- 大鐘啓伸 2010a 児童センターにおける子育て支援ワークショップの効果. 日本臨床発達心理士会第6回大会発表論文, 66-67.
- 大鐘啓伸・川久保麻里・服部陽子・杉村照代・大杉陽子・舟橋あゆみ・高井富夫 2010b 清須市療育研究会報告書. 愛知県清須市健康福祉部.
- 大鐘啓伸 2012 保育園の親子遊びの場面における幼児の愛着表現. 日本発達心理学会第23回大会発表論文, 557.
- 大鐘啓伸 2016 保育園の親子遊び場面において親子関係はどのように展開するのか? - 愛着に関する行動から -. 日本家政学会誌, 67 (6), 341-349.
- 大鐘啓伸 2017 親子遊びを通じた幼児理解の方法に関する研究 - 親子関係評価要因との関連から -. 名古屋女子大学紀要, 63, 265-276.
- Rosenberg M 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton University Press.
- 桜井茂男 2000 ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 手島聖子 2007 乳幼児健康診査を通じた育児ストレス調査 - 育児ストレス尺度の信頼性と交差妥当性の検討. 家庭教育研究紀要, 29, 77-83.

## Abstract

In this study, I evaluated the parent-infant play by “attunement” and “separation anxiety” in the nursery school, and analyzed the influence on “parenting anxiety” and “self-esteem”. About 39 sets of mothers and infants of a typically developing aid group, 31 sets of mothers and infants of an untypically developing aid group, 18 sets of mothers and infants of an untypically developing non-aid group, I recorded the parent-infant play on a video, and evaluated “attunement” and “separation anxiety” of parenthood. Furthermore, I measured “parenting anxiety” and “self-esteem” with questionnaires. As a result, I was able to evaluate the parenthood from the parent-infant play. Evaluation factors were “attunement”, “separation anxiety”, “parenting anxiety” and “self-esteem”.